

図書館だより



No. 11

平成31年2月28日

3月16日(土)には、いよいよ飯能市にムーミン一家と出会うテーマパーク『ムーミンバレーパーク』がオープンします。この日を楽しみに待ちわびていた人も多いのではないのでしょうか。すでに入園無料のゾーンはオープンしており、期間限定で『チームラボ 森と湖の光の祭』が開催されています。今週末(3/3)までとなりますが、ムーミンの前に光が織りなす幻想的な世界を散策しに出かけてみるのもおすすめです。



さて、季節はこれから春に向かっていきます。去年は桜の開花がとて早く驚きましたが、関東は今年も例年並みか少し早めの開花との予想が出ています。満開は3月30日ごろということですから、お花見の計画は早いうちから練っていた方がよさそうです。この時期はいちご狩りも魅力的なレジャーですね。この近辺でも気軽にいちご狩りが楽しめる施設があるので春休みにお出かけするのにおすすめです。

ムーミン谷って、こんなところ

949.8-ヤ 『ムーミン谷への旅』 講談社

ムーミン谷はどんなところなのか、ムーミンにはどんな仲間がいるのか、どんな暮らしを送っているかなどムーミンの物語世界だけでなく、ムーミンの生みの親であるトーベ・ヤンソンや彼の故郷フィンランドについてもまとめられた1冊です。ムーミンといえば、世界中で愛されるキャラクターであり、すぐにその姿を浮かべることができますが、こうして改めて知ってみると、新たにたくさんの発見があります。これからムーミンバレーパークに行ってみようと思っている人は、その前に読んでおくことよりパーク内を楽しむことができることでしょうか。フィンランドの魅力を知るのにも最適です。

いちごで作ろうおいしいお菓子

596.6-7 『いちごのお菓子』 若山 曜子 || 著 マイナビ出版

そのまま食べてもおいしいいちごですが、お菓子にするとおいしいだけでなく、いちごの形や綺麗な赤い色がお菓子の見た目をとても可愛らしく仕上げてくれるという素敵な効果があります。タルトやクッキーだけでなく、パイにしたり、キャンディーにしたり、パウンドケーキにしたりと様々なレシピが載っています。オープンを使わずに作れるムースやキャラメル、大福のレシピなどもありますので、時間をかけず簡単においしいものが作りたいという時にもおすすめです。バレンタインの友チョコのお返しとしてホワイトデーに作ってみるのもいいですね。

贈る言葉に代えて

これが3年生へ渡す最後の号となりました。本を読まなくても暮らしは成り立つし、読書を強制はできません。だけど、本がもたらしてくれるものは大きいとみなさんに伝えたくて、図書館だよりを作っています。読書を通して掬い取った言葉や思考は自分の中に根付き、生涯の糧となります。本を楽しむことで、無意識に多くのことを学ぶことができるのです。そのおもしろさに気づき、本のある人生を送ってください。

913.6-7 『1R1分34秒』 町屋 良平 || 著 新潮社

芥川賞受賞作。目指していた職業には就けたもののうまくいかない。周りが羨ましく見える日々。自分に自信をなくしてしまう時がこれから来ると思います。しかしうまくいかないわけはありません。なぜならこの道を選んだのは紛れもなく自分自身ですから。うまくいくまで、納得がいくまで突き詰める「ネバーダイ」の精神を持ってこれからも頑張ってください。卒業おめでとう。

【国語科 鈴木信晃先生より】

913.6-シ 『いまは、空しか見えない』 白尾 悠 || 著 新潮社

智佳と優亜、ふたりの少女を中心に描かれた連作短編集。同じ高校というだけで、何の接点も持たないふたりは、それぞれの思いを抱えて飛び乗った長距離バスの中で出会う。優等生の智佳は、そつなく勉強をこなすが、父親の機嫌を伺ってばかりの息苦しい生活を送っていた。派手な装いの優亜は、派手な見た目と反して心の傷を抱えていた。ここから逃げたい、自分を変えたい、強くなりたい、夢を叶えたい、様々な感情の渦の中で戦いながら、ふたりは自分の道を切り開いていく。その姿からは未来のために自分がどう進めばいいのか、そのヒントをもらえるはず。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

佐野洋子さんの『100万回生きたねこ』(E-サ 講談社)という絵本を知っていますか。100万回も死んで、100万回も生きたねこが、100万回目の人(猫)生で、初めて誰かを愛することを学ぶ物語です。この絵本から構想を得て、13人の作家や挿絵画家が描いた短編集『100万分の1回のねこ』(B913.6-E 講談社)を読みました。あの100万回生きたねこのことを、感じの悪いひねくれたねこだと思う人もいれば、かわいそうなねこだと思う人も、幸せなねこだと思う人もいるように、同じ『100万回生きたねこ』を読んで書いたものでも、どんな視点で、どんなことを、どんな風に膨らませるのかは作家さん1人1人で全然違って、思いもよらないストーリー展開を楽しませてもらいました。あのねこのように何べんも生きようとした女の子を主人公にしたり、あのねこの何回目かの生涯を想像してみたり、あの絵本をプレゼントしてくれた男に恋してみたり、様々な物語がありました。あのねこは、一体どれだけの人に影響を与えていくのでしょうか。この後、図書館でもねこについて先生方と熱く語り合い、その余韻がまだ醒めずにいます。【今井】

そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ~湯本先生編~

司(以下 司):湯本先生とお話するにあたって、ちょうど去年の今頃、湯本先生おすすめ『沈まぬ太陽』を読んだことを思い出しました。山崎豊子を読むのも、ああいう企業の闇を描いたものを読むのも初めてでしたが、すごく引き込まれて一気に読みました。

B913.6-ヤ 『沈まぬ太陽』
山崎 豊子 || 著 新潮社

湯本(以下 湯):山崎豊子の作品は『運命の人』も読みましたが『沈まぬ太陽』ほどには引き込まれませんでした。また時間があるときに『大地の子』など他の作品も読んでみたいと思います。

司:1年前は『沈まぬ太陽』で、今は夏のおすすめ本で紹介していただいたさだまさしの『風に立つライオン』を読んでいたんですけど、これもすごくおもしろいですね。東日本大震災のことにも触れているし、いいタイミングで読めたなと感じました。

B913.6-サ 『風に立つライオン』
さだ まさし || 著 幻冬舎

湯:さだまさしの歌は全然聴きませんが(笑)、1冊読んでみたら「ああ、こういうのを書くんだった」と意外でおもしろかったです。自身の歌から物語を作っているようですが、『風に立つライオン』はモデルとなった人が実際にいるみたいですね。

司:湯本先生は、自分が紹介する本はスポーツもの、戦争ものばかりとおっしゃっていましたが、『風に立つライオン』もケニアの戦地の病院で働く医師が主人公でしたね。この本は戦争もの、とは違うけど、結城先生の回でも戦争を描いた小説の話が出たので、湯本先生の印象に残っている戦争ものがあれば教えてください。

湯:戦争ものは結構読んでいます。小説だけではなくノンフィクションも読みますが、最近読んだ中では村上早人の『ハヤト』がよかったです。戦後生き抜いた、子どもを含む若い世代がリアルに描かれていて、今だったら絶対認められる生き方ではないのですが、当時はそうせざるを得なかった人たちが、どのように大人になっていったかがわかる、いろいろな面で心を打たれる1冊でした。

『ハヤト』
村上 早人 || 著 新潮社

司:この間、直木賞を受賞した『宝島』も戦後の沖縄で子どもたちがどう大人になっていったかが描かれていますが、子どもの視点になった時に例え淡々と描かれていても戦争の悲惨さがより伝わってくると思いました。

湯:戦後、そこで生きていくということは、綺麗事とか平時で考える常識とかが通用しなくて、「どうすれば死ななくて済むか」ということが中心になりますよね。今では認められないようなことの中にしか活路が見いだせないとか…私たちのなかにそういう経験がないからこそ、その時代の人たちの目線で当時を見るということは考え方や世界を広げるひとつではないかと思います。「戦争ものが好き」なわけではなくて、そんな時代の中にあっても人はそれぞれいろいろなことを思いながら必死に生きていて、その人たちの歴史があったからこそ私たちがいるということの実感を持ちたいのだと思います。

司:『風に立つライオン』を読んだきっかけは何だったんですか。

湯:本を選ぶときは、特に好きな作家がいるわけではなくて図書館や書店でザッと本を見て、ちょっといいなと思ったものを手に取って2、3ページ読んでみて「いいな」と思ったらそれを読むという感じです。この本もなんとなく選びました。決まった作家の作品を読んでみても、おもしろいものもあれば、そう思えないものもあ

るので、もっぱらそういう選び方をしています。でも意外と高確率で面白いものと出会えます。

司:好きな作家でも、全部の作品をおもしろいと感じるかっていうと違いますよね。

湯:いいとわかっている作品でも、その時の気分で「今はいいや」と思うこともあるし、その時にフィーリングが合うと感じたものを読むのでもいいと思います。『乱読のセレンディピティ』(外山滋比古)です(笑)

司:(笑)だんだんと本を開いてわかるようになりますよね、「あ、今私はこれが読みたいな」とかって。高校生の時もそういう選び方はしていましたか。

湯:高校生の時は結構作家で選んでいて、村上龍や山田詠美が好きでした。村上龍は今でも読むことがありますし、エッセイも好きです。山田詠美は『僕は勉強ができない』から読み始めましたが、高校生の時の自分からすると、自分自身の日常にはない大人の世界に惹かれたのかもしれない。

司:そうそう、山田詠美のはちょっと背伸びした男の子や女の子が出てきて、ドキドキしながら読みました(笑)

湯:村上龍も『限りなく透明に近いブルー』など日常では絶対触れない世界が広がっていて、高校生のときはそういう強い刺激を求めるエネルギーがあったのかもしれないですね。

司:私は高校生の時って、森絵都やよしもとばななが好きだったんですけど、『DIVE!!』(森絵都)は中でもお気に入りだったので、前に湯本先生がおすすめ本に挙げてくれた時、すごく嬉しかったです。

湯:『DIVE!!』(飛び込み)もおもしろかったし、『一瞬の風になれ』(陸上)や『風が強く吹いている』(駅伝)も好きだし、基本スポーツをしているものは好きだと思います。最近、まはら三桃の『白をつなぐ』(駅伝)や関口尚の『空をつかむまで』(トライアスロン)を読みました。

司:関口尚は結城先生のおすすめ本だった『プリズムの夏』を読みました。青春の眩しい感じを上手に描く作家さんだなと思いました。

湯:そう、眩しいのだけど、違う問題も出てきて、ただの青春小説で成功して終わり、ではないおもしろさがありました。海外文学では最近オバマ大統領がおすすめしていたアチェベの『崩れゆく絆』を読みました。

司:オバマ大統領のおすすめ本ですか! どうでしたか?

湯:黒人の社会にいかにして白人が入り込んできたのかを、白人目線ではなく、原住民の目線から見た作品なのですが、話そのものがおもしろいというよりは、白人が入ってきて、その地域の人々が違和感を持ちながらも、徐々に自分たちの生活を崩壊させていく様子がよくわかりました。

司:読書はストーリーを楽しむだけでなく、色んなことを無意識に学んでいけるし、意外な場所で自分の心が動くのを発見したりできるものなんだと最近改めて感じるし、だからおもしろくなって思います。

湯:知識も得られますし、また、さまざまな感情を喚起させてくれる触媒みたいなもの、かもしれませんね。

司:それを先生方と語り合っただけで共有する楽しさを知った1年でした。今年読んでいきたい本は何かありますか。

湯:本当にいつもその時のフィーリングで決めているので、「こういこうのを読んでいこう」というのはとくにありませんが、今は図書館で借りた『風をつかまえて』を読んでいます。

B913.6-マ 『白をつなぐ』
まはら 三桃 || 著 小学館
B913.6-セ 『空をつかむまで』
関口 尚 || 著 集英社

933-ア 『崩れゆく絆』
チヌア・アチベ || 著 光文社

913.6-タ 『風をつかまえて』
高嶋 哲夫 || 著 文藝春秋